

政務調査報告書

1. 政務活動名 「観光における民泊と体験観光の視察研修」

11月30日(水)～12月2日(金)

視察先 沖縄八重瀬町自然体験学校 民泊先 神谷清治宅

2. 政務活動内容

●沖縄県八重瀬町

八重瀬町は2006年に島尻郡東風平(こちんだ)町と具志頭(ぐしちゃん)村が合併して出来た、沖縄本島の南部に位置する町である。元々八重瀬町には那覇や名護とは違い観光資源に乏しく、観光客がほぼ0の町だった。しかし体験学習で修学旅行を受け入れる事により、整備が進み、今では沖縄一の修学旅行生の受け入れ先となっている。



●自然体験学校による八重瀬町の魅力発信(ガイドによる)

沖縄への修学旅行において「平和学習」「体験学習」「教育民泊」は、ほとんどの学校が取り入れをしている。その中において、平和教育と体験学習は修学旅行期間中の学習アイテムとして大変重要である。

【勢理城(じりぐすく)と富盛(ともしり)の大獅子】
大きな石を掘り出して作られたといわれているこのシーサーは、地元では「富盛のシーサー」と呼ばれ、昔からこの地域の守り神として信仰の対象とされてきた。このシーサーが建てられる以前の富盛地区は、なぜか火事が頻発しており、不安な日々を過ごしていた村人たちは、ある風水師に相談します。すると風水師は、火事の原因が「火山である八重瀬岳にある」といい、火事から村を守るためには、シーサーを八重瀬岳に向けて設置するよう指示したのです。村人たちが風水師に言われた通りにシーサーを置いてみると、不思議なことにそれ以降、火事はなくなりました。そしてこの事があってから、沖縄各地にシーサー信仰が広まり、地域レベルではこの石獅子(シーサー)が最も古いといわれている。

シーサーをよく見ると、体には無数の穴がある。これはすべて弾痕で、八重瀬岳と富盛地区は戦時中、日本軍が首里撤退後、重要な防衛拠点としていた地点。



アメリカ軍が南部に上陸してくると想定して布陣したため、北部から進撃してきた米軍にはほとんど役に立たず、結果アメリカ軍により占領された。この銃痕あとは、その時にアメリカ軍が銃を大獅子に向かって打ち込んだときにできたものである。

【ガマ入壕体験・白梅学徒看護隊のガマ（壕）の跡】

沖縄には隆起珊瑚礁が多く、琉球石灰岩の地層で形成されているため、洞窟や鍾乳洞が多く、自然洞窟が2,000カ所ほどあると言われている。600年前に築かれ「下の世の主」の居城と言われている八重瀬グスクの麓にガマがあり、そこにはかつて第24師団第一野戦病院本部壕と手術壕があった。1945年に沖縄戦で看護教育が始まり、沖縄県立第二高等女学校の4年生は、わずか数週間という期間でガマの中にある野戦病院に配属された。校章が「白梅」だったことから、「白梅学徒隊」と呼ばれた。当時は薬などは何も無く、手足の重いケガは切断するのがほとんどであった。外は常に攻撃の激しさから、生きるのに必要な水を汲みに行くときに命を落とす生徒もいた。6月4日に米軍の猛攻に遭い南部へ後退することになり、「白梅学徒隊」は解散になり、それぞれで南部に逃げる事になった。配属された46名の生徒の内、22名が犠牲になった。

ガマの入り口は焼けた跡の残る石が積まれており、当時の攻撃の激しさを感じる。入り口は狭いものの、中は上が広く奥行きもあり、倉庫などに使っていた場所もある。しかし、洞窟内なので明かりを消すと漆黒の闇になり、当時のことを思い黙祷せずにもいられない。現在は発掘されており、ガマ内からは銃弾などが見つかった。



ガマに向かう階段



ガマの入り口



ガマ内から見つかった銃弾

【ホロホローの森散策】

八重瀬町具志頭にあるホロホローの森は、具志頭浜と民家のある場所の間にあるジャングルで、元々地元の人達は足を踏み入れない場所である。その具志頭浜に向かうジャングルに600mほどの遊歩道が整備されている。ホロホローとは地元で「ヤブニッケイ」と呼ばれるが沢山自生していることから名付けられた愛称。ホロホローの森にはヤブニッケイをはじめ、ガジュマルやアコウ、アカギなど100種類を超える植物のほか、オオヤドカリやクロイワトカゲモドキといった希



少な生物、オオゴマダラやナナホシキンカメムシ・ナナフシなどの昆虫類、シリケンイモリ、オキナワキノボリトカゲなど多種多様な生物が生息している。また具志頭浜では、サンゴ礁によってつくられた琉球石灰岩の独特の景観を見る ことが出来る。また、海岸に流れ着いたマイクロプラスチックや海洋ゴミの問題をはじめ、海の未来を考えるSDG'sの内容についても学習するプログラムもある。



【その他の視察先】



伊覇のシーサー



ひめゆりの塔・資料館



八重瀬メモリアルパーク

●民泊研修（民泊の仕組み）

八重瀬町具志頭にある自然体験学校は、かつて観光とはほど遠い八重瀬町において、何も無いと思われていた中から、農業・漁業などの地域振興や、戦跡・史跡などの地域資源を活かした多種多様な体験プログラムを開発。また、八重瀬町を中心に南部の地域を連携させる事によって、広域で連携した協力体制が可能になり、交通アクセスが便利になり料金を抑えられる。さらに、地域の人材育成、地域・団体・自治体との連携をとることで整備が進んだり、安全対策や保険対応もきっちりと行っている。それらを全て、マニュアル化することにより、修学旅行などの受け入れにつながっている。その中で、受け入れの宿泊の問題を解決させたのが民泊を通じた生活体験である。完全にマニュアル化された民泊の仕組みを、自然体験学校の事務所にて研修を受けた。



<簡易宿所営業許可取得について>

- ・旅館業は、ホテル営業・旅館営業・簡易宿所営業・下宿営業の4つに分類され、民泊は「簡易所営業」の許可が該当する。
- ・宿泊対象となる部屋の延べ床面積が宿泊者1名あたり3.3㎡異常（約2畳）で、申請するフロアはトイレのあるフロアのみ。1，2階にトイレがある場合全フロアで申請可能。
- ・営業許可の取得が可能かどうかは、管轄の保健所へ図面を持参し相談する。
- ・農山村滞在型余暇活動の場合は、必要な役務の内容を記載した書類、又は各所名が必要。
（この地域では、簡易宿所営業許可のみとする）
- ・「消防法令適合通知書」の取得などが必要。

＜新規受け入れ家庭の運営について＞～受け入れ団体・事務所向け

民泊受け入れは地域活性につながり、ほとりにても多くの地域の方に参加して、地域の周知を図る。修学旅行は時期が決まっているので、その季節に集中し、1学年の人数が350名を超えたり、100近い班分けを希望する場合がある。そのために必要なこととは

1. 受け入れ趣旨
2. 受け入れに必要な条件（家庭体験に必要な事や、注意など）
3. 主な工程スケジュールの説明
4. 登録用紙の記入・確認
5. 救急蘇生法の講習受講
6. 登録

＜受け入れに必要な講習会について＞

- ・食品衛生講習会・アレルギー講習会・救急蘇生講習会（L, S, F, Aの取得）
- 受け入れ事前学習説明会
- （その他）料理勉強会・防災講習会・体験勉強会・平和学習勉強会
- 民泊に関わる法令について・意見交換会

＜受け入れマニュアルについて＞～家庭用

- ・受け入れマニュアルにある事柄を熟読し、安全に気をつけ受け入れる。
- ・緊急受け入れ・緊急連絡手順
- ・災害に遭遇したときの緊急対応マニュアル

＜家庭での体験マニュアル＞～沖縄南部広域宿泊体験協議会の場合

民泊は普段の暮らし、生活を子ども達に触れさせてあげる。一緒に過ごすことが大事。特別なことをするのは無く、地域の良いところを教えてあげたり、必ず体験を入れる。

- ・三線。空手、鼓舞、手芸などの趣味や特技
- ・一緒に近くの漁港に行き市や魚見学
- ・沖縄料理、おやつ作り
- ・近所の古民家やシーサーを案内
- ・畑を案内、収穫、調理
- ・排所や史跡の案内
- ・直売店に行き沖縄の野菜や果物を見せる
- ・ペットと散歩など
- ・アレルギーやてんかんや持病、適応障害、ハンディキャップなどの事前対処知識

＜旅行会社・学校向け事前確認資料＞

教育旅行民泊受け入れに当たって、事前に学校の先生方と受け入れ家庭の間に情報・認識を共有しておく必要がある。そのための事前周知マニュアルを活用する。

- 受け入れ組織～沖縄南部広域宿泊体験協議会
- 受け入れ家庭～受け入れ可能の意思・事前説明の出席・各講習会の受講など
- 学校本部～連絡体制や注意事項など
- 家庭登録内容・受け入れ人数に合わせて家庭リストの作成
- 学校からの子ども情報～アレルギーの確認など（その他の提出書類）

○自己紹介カード健康チェックカード・協議会の班編制表・民泊参加同意書
民泊体験健康調査・民泊体験生徒プロフィール など
《参考資料 農家民宿・教育旅行民泊 安心・安全な体制構築の手引き》

●修学旅行（新潟県立中条高校）民泊対面式とお別れ会見学
コロナ過により中止されていた修学旅行民泊の受け入れが久々に行われた。修学旅行に当たっては、事務局側と学校・民泊受け入れ家庭の中で事前の情報提供や事前の視察が1年以上も前から行われ、いよいよ受け入れ当日となった。

八重瀬町にある「南の駅やえせ」の外にあるアーケードのある大きめなイートスペースで行われた。民泊の受け入れの家庭の人達は事前に集まり、子ども達の到着を心待ちにしている。バスが到着するとぞろぞろと子ども達が降りてきて、すでに編成されていた家庭におよそ1家庭3～5名ほどの生徒が、すぐさま決まっている家庭に集まった。すでに仲の良い家族のように感じられた。事務局から改めて挨拶と注意事項や説明が終わった後、それぞれが迎えに来た家庭の車に乗り込んだ。事前に決められていたことなので、到着から乗車までがとにかくスムーズなのが印象的だ。先生方は特別なことがない限り、それぞれの家庭には訪問できないことになっているようだ。

次の日の朝10時半頃、具志頭中央公民館に子ども達はそれぞれの家庭に送られ、代表の生徒と先生がお礼の感想を述べた後、子ども達は別れを惜しむように少しだけ「お父ちゃんやお母ちゃん」と最後のおしゃべりをしていた。1泊だけでも、感極まり泣く子がいるということだそう。そして帰りのバスが見えなくなるまでいつまでも手を振った。この民泊を始めてから、またここに訪れる者や、永住者が何人もいるようだ。

●民泊体験～神谷清治宅

今回お世話になった神谷さん宅は、子ども達もすでに大人になって家から離れ、もうすでに6人の孫がいる74歳の初老の方とその奥さんの家で、民泊した。通常は修学旅行しか扱っていないとのことだが、民泊の視察したいということで生徒と同じ感じだというお願いをして、特別に受け入れを承諾してくれた。午後6時半頃家に入り、自己紹介をし、お互い少し堅かったがすぐに打ち解けることができた。神谷さんは沖縄の楽器「三線」の名人で、この「三線体験」が人気のようだ。シャワーの後（沖縄和風呂文化がほとんど無い）すぐに食事が運ばれた。本来なら食事の手伝いを子ども達はするそうだが、手伝いを買って出たが奥さん遠慮されて断られた。神谷さんからは家族の話、郷土の話、地元の祭の話などを聞き、我々も上ノ国や北海道の話をして盛り上がった。夜10時半頃、すぐ近くの空手道場で「棒



術」の練習をしているからと、見学交流をしてきた。ここの地元の子ども達は全てこの「棒術」を習い、祭などで披露するそうだ。祭のビデオも見せてもらい、この地域の育んできた歴史や文化が色濃く残っていることをとても感じた。

11時頃就寝するため、昔子ども達が使っていたという部屋とベッドを使わせてもらう。まるで実家に帰ってきたようにぐっすりと寝られた。

次の日の朝、朝食の後「三線」体験をさせてもらった。この体験は沖縄を感じられる素晴らしい体験だ。また、大学生のお孫さんが参加し、三線を弾きながら沖縄の民謡などを歌ってくれた。とにかく楽しい時間を過ごさせてもらった。お昼ご飯もそこでよばれて、沖縄で人気の「タコライス」を食べさせてもらった。とにかく奥さんは我々の手伝いを断ってきたが、奥さんの作る沖縄料理が何品も出てきて、どれも非常にうまかった。通常なら食事作りや用意の手伝い、布団敷きや布団たたみなども全て自分たちでやるのがルールだそうだ。再び訪れる事を約束して、神谷さん宅を後にした。



3. 政務活動成果

●上ノ国における観光と宿泊施設の現状

上ノ国は山・川・海に囲まれた自然に恵まれた場所である。また、和人が北海道で最も早くに住み、館跡などの中世の歴史が色濃く残っている。また、道内で最も古い民家やお寺や神社がある歴史的価値のあるところである。

最近では函館空港から木古内までのバイパスや、木古内・江差線が高規格道路として道路整備が進み、今後整備が進むにつれてアクセスが良くなると思われる。

木古内方面からの玄関口である湯ノ岱では、古くから馴染みのある温泉や鮎釣り、また廃

校を利用したワイナリーと宿泊可能なサテライトオフィスにも期待が寄せられている。



しかし、ワイナリーは今後期待されるものの、現状では観光で来町する人々は「道の駅もんじゅ」に寄るだけというのが現状である。他には歴史ツアーで来る人達や、勝山館ガイドダンス・旧笹浪家住宅跡などの施設に来るものの、人数はそこまで多くなく、また宿泊にまでは至っていない。

上ノ国の宿泊施設は現在旅館が2カ所、民宿が6カ所の計8カ所で、ほとんどが公共事業で上ノ国に仕事で来る人達の宿泊が主である。

また、長期の仕事でビジネスとして宿泊している人も多く、一般の観光客とビジネス客の食事やサービスに差があるため、一緒に宿泊をとるのを嫌がる宿もある。

そこで、最近観光や教育旅行の面でも民泊に注目があることから、上ノ国町で民泊を行うためにはどのようなシステムが必要なのか、民泊で宿泊客を受け入れるためには何が有効なのかを視察調査の題材とした。

●総評

今回のこの視察調査で感じたことは、元々地元の人達は何もないと言われていた観光が皆無に近いこの場所で、ただ普段気づかない地元にあった「あたりまえ」が、整備マニュアル化することにより、修学旅行では学習の素材になる。また体験を通じて、地元にある文化や歴史や景色が都会の修学旅行生には、良い素材になると感じた。また、民泊を通じて家庭の温かさ、文化や食や地元の人に触れることで、心に響くものがある。コロナ前には、観光ほぼ0だった八重瀬町には、年間最大45,000人の修学旅行生が訪れ、宿泊体験していった。つまり4億円近い経済が生まれたことになる。この「体験学習」「平和教育」「民泊学習」は、特別からできるものではなく、「造る努力」と「やる努力」があれば上ノ国でも十分可能性があると感じた。すでに近隣町では木古内町では「体験と民泊」を小規模ながらも実行している。また江差町でも、「マリンピング」を中心とした体験事業に力を入れている。この事業は上ノ国町1町だけで完結するのではなく、渡島檜山広域で受け入れできる体制ができれば、十分可能性があると感じている。